

死んだ後に残るもの



写真は、妻と妻の（母方の）伯母です。

先月、上京スケジュールを検討していた際、「東京の伯母さんどうしているかな？」妻が言いました。

伯母さんとはもう30年近く会っていません。幼少の頃とてもお世話になったそうで当時の恩を返すべく訪問することにしました。

伯母さんは、なんと95歳！

歩行はやや辛そうですが、頭はしっかり“し過ぎ”ていました（笑）。

ボケない人は、やはり「頭の回転が速い」という特徴がありますね。

伯母さんは娘さんと2人暮らし。気を遣わせては悪いと思い、アポなしで訪問。結果、娘さんは不在。伯母さん曰く「娘は家にほとんどいないのよ～～」お昼も適当に自分で作って食べているそう。

私は伯母さんの元気の源を、そこに見ました。
体は老いても、心は「自立」しているのです。
娘と住んでいても、娘に頼り過ぎずに、自分のことは自分でしようと動く。

反対に、体だけではなく心まで老いている人というのは、
依存心が強く、家族にしてもらうことが当たり前だと思っている。
家族への感謝はなく、不平不満と愚痴ばかりで、やがて家族に疎まれる・・・

95歳。認知症にも寝たきりにもならず、元気に生きている現実。
その秘訣を伺ってみました。

「う～～ん、食事や運動に特別
気をつけて来たわけじゃないけど・・・
そうねえ～～

クヨクヨしないことかな！」



そして時効の話ということで、
伯母さんは胸の内を語ってくれました。

結婚してからは、お酒に溺れた夫に相当苦労されたそうです。
60代で夫との死別を経験しましたが、正直、未亡人になって晴れ晴れした、と。
最期まで献身的に夫に仕え、看取った。やり残したという後悔は何もない。

葬儀の後、「やっと自分の人生を生きることができる」
むしろ、希望に満ちていたそうです（笑）

これは私の偏見かもしれませんが・・・伯母さんに限らず、元気な女性高齢者は早くに夫を亡くされた方が多いようです。さらに共通していることは、夫の酒・女・ギャンブル・暴言暴力などに悩まされてきた。
皮肉なことですが、そうした夫の“功績”は、妻に死別の悲しみや虚無感を残さなかったことです。妻にずっとガマンさせて来たからこそ、自らが去った後に「自由」と「解放感」と「生きる希望」を妻に残すことができたのです・・・（´ ｀。）

「世の男性諸氏！ 妻の幸せのためにも1日も早くあの世に逝きましょう！！」
といった趣旨の今月号の太田東西かわら版ではありません（笑）

それでは本題に入ります。表紙の写真を再度ご覧ください。
伯母さんが6歳の時の写真を2人で見えています。

妻は、ある人から言われたことがあります。
「あなたの守護霊さんは、母方の曾祖母さんですね」

そんな“目に見えない世界”を、信じるか信じないかは、さておき・・・
妻はいい機会だと伯母さんに尋ねてみました。
「どんなおばあちゃんだったの？」

すると、「写真があるよ！」と言って見せてくれたのです。
今回、妻が伯母さん宅を「訪ねて」、曾祖母さんのことを「尋ねて」いなければ
絶対に見ることはなかった90年前の写真です。



左端から（妻の）曾祖母～伯父～祖母～伯母～祖父～曾祖父となります。
90年前、1928年（昭和3年）の写真です。

「こんな写真を撮れて裕福だったのね？」と伯母さんに訊くと、
「この時まで日本は良かったのよ。これから戦争になって悲惨になったのよ・・・」
戦前～戦中～戦後を肌で感じ生き抜いて来た、含蓄ある回答でした。

そして、

「とっても穏やかでやさしいおばあちゃんだったわよ」

さらに、

「おじいちゃんもやさしい人だったのよ」

写真をよく見れば、みんな真面目な顔で写っているところ、両端の曾祖父母さん2人だけ微笑んでいるような（笑）。きっと穏やかな夫婦だったのでしょう。

さて、私事ですが

私が妻と結婚したいと思ったのは、妻が「穏やかな女性」だったからです。おしゃべりではなく、人の悪口を言わない、心のやさしい女性だったから。

そのルーツが、「家系」にあったんだ！と夫の私は確信しました。

妻と結婚した時には、曾祖母さんは他界していましたが、祖母さんは健在でした。

その祖母さんも、やさしい人でした。

太田東西薬局開業の時には、たくさんのお祝い金をくださいましたし（笑）

祖母さんも早くに夫を亡くされましたが、享年99歳で長生きでした。

そして妻の母、私からみて義母さんも、穏やかでやさしい女性です。

結婚する前、私が初めて妻の実家を訪れた際には、笑顔で歓待してくれました。

曾祖母～祖母～母～娘。4世代に渡って穏やかでやさしい女性。

いわゆる「遺伝」というのは、先天的に決定されたもののようですが、そうではなく

「その家系がどういう生き方をしてきたか？」に起因しているかもしれません。

「人が死んだ後に残るものは何か？」 それはその人が

「どんな人で、どんな生き方をしていたのか？」 それが残るのです。

曾祖母さんから見て、妻は「ひ孫」。没後、時は流れて平成30年の今。

曾祖母の生き方は、「とってもやさしい人だったんだ」と、ひ孫の心に残った。

「とってもやさしくて思いやりのある人だったよ」

自分という存在が、そんなふうに語り継がれたら嬉しいですね！ そのためには

「子孫に恥じない生き方」。最期まで意識して生き抜くことです。